

1年、まだこれから

震災後、初の「3・11」がやって来た。「その日は、家族といたい」。梨奈さんは大学のある東京から、サークル活動の合間を縫って、会津若松に数日間だけの帰省をした。

1年前、免許取りたてで運転する車の中で地震に遭った。隣に乗せた沙也加さんの

助言でいつも通る海沿いの道を避け、自宅の幸さんと合流した。

夜になって勤務先の郵便局から避難場所に駆けつけた光一さんは、津波の甚大な被害も原発の異常も知らず「明日は出勤して、局内の片付けかな」と思っていた。家族みんなが、平穏な日常が断ち切られたとは信じられずにいた。

今も、「3・11」を特別視すれば、かつての生活に戻ってこない気がする。

いつの日か

原発1キロからの避難

「だから、自然と過ごすようにした」と幸さん。

自分は光一さんと日帰り温泉に出掛け、姉妹は市内の追悼行事に参加した。ただ、2時46分には、4人がそろって黙とうした。

場所は別々でも、犠牲者の冥福を祈りながら心に浮かべたのは、帰れぬ故郷のこと、先の見えない暮らしのこと。目を開け、光一さんと幸さんは、どちらからとも

なく声をかけた。「まだまだ、これからだね」

一家の歩みは続いていく。(終わり)

■(はなわ)さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(44)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生生活。